



TITLE:

アフリカ独立五〇年を考える --ア フリカ現代史の書きかえに向けて

AUTHOR(S):

川端, 正久

CITATION:

川端, 正久. アフリカ独立五〇年を考える --アフリカ現代史の書きかえ
に向けて. 地域研究 2009, 9(1): 48-67

ISSUE DATE:

2009-03-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/251264>

RIGHT:

©地域研究コンソーシアム『地域研究』編集委員会 2009

アフリカ独立五〇年を考える

——アフリカ現代史の書きかえに向けて



川端正久

二〇〇〇年代に入り、「アフリカ独立五〇年」の時期を迎え、アフリカ現代史に関する著作の刊行が相次いでいる。そのなかでも代表的な著書は次の三冊である。

ニュージェント『独立後のアフリカ 比較史』（二〇〇四年）は主として研究者と学生向けに書かれた研究書で、著者ポール・ニュージェント（Paul Nugent）はエディンバラ大学歴史学部教授（アフリカ比較政治史）である。主要著書に『ガーナにおける民族 発明の限界』（二〇〇〇年）、『ガーナにおけるビッグマン、スモールボーイおよび政治』（一九九六年）がある。本書は記述に若干の間違いや誤植があるけれども、内容は高度であり、アフリカを研究する学者、アフリカ問題をさらに勉強しようとする学生にとつ

て有用である。構成はテーマ別で、大まかな時期区分によっており、各国史は詳細に記述されている。ニュージェントはアフリカ現代史の主要なテーマと理論的事項、たとえば分析枠組み、アフリカ現代史論争、アフリカの独立、独立における継続と断絶、「計画された脱植民地」論、パン・アフリカの思想、近代化と伝統、部族と部族主義、アフリカ社会主義、軍事支配、第二の解放、構造調整政策、多党制と民主主義、ペシミズムとオプティミズムなどについて議論を展開している。視点はペシミズムだが、二一世紀の新しい動向にも注目している。

アーノルド『アフリカ 現代史』（二〇〇五年）はアフリカ問題に関心を寄せる一般読者向けに書かれた概説書

で、著者ガイ・アーノルド (Guy Arnold) はアフリカの紛争などアフリカ問題全般にわたって多くの著書を執筆・編集してきたベテランのフリーランス・ジャーナリストである。主要著書に『新生南アフリカ』(二〇〇〇年)、『非同盟運動 第三世界歴史辞典』(二〇〇六年)がある。本書はアフリカの独立から現在までを一〇年ごと——第一部「一九六〇年代」「希望の一〇年」、第二部「一九七〇年代」「現実主義の一〇年」、第三部「一九八〇年代」「バスケット・ケース」、第四部「一九九〇年代」「新しい方向と認識」——に時期区分している。構成は地域別、国別、テーマ別になされ、わかりやすく、とりわけ各国史は詳細で正確に記述されている。事件や出来事、紛争に関する詳細な解説は圧巻であり、読み物としても面白い。アフリカ社会主義、援助と開発、新植民地主義、アフリカ合衆国論など主要なテーマと理論的事項にも的確に論及している。植民地主義批判の姿勢を明確に示し、視点はオブティミズムで、アフリカ・ルネサンス論に近い。

メレディス『アフリカの状態 独立五〇年史』(二〇〇五年)は、ヒースロー空港内の書店にも山積みされていたように、広く一般読者向けに書かれた物語スタイルの平易な読み物で、著者マーティン・メレディス (Martin Meredith) はアフリカ問題を題材にしているジャーナリスト・歴史家である。主要著作に『ネルソン・マンデラ伝

記』(一九九七年)、『ムガベ ジンバブエにおける権力と略奪』(二〇〇三年)がある。本書の構成は大まかな時期区分によっている。政治家の動向に焦点が当てられているので、ビッグマン政治論である。弱点は記述の根拠を示す出典(脚注)がないことである。たとえばローラン・カビラは大統領警護隊員によって暗殺されたことはすでに明らかになっているが、この事件はカビラのいとこのカペンド大佐による宮廷クーデタであったと解説している。これは興味深い解説だが、残念ながら、その根拠が示されていない。この点で、研究者には不満が残る内容である。同書の別題名『アフリカの運命 解放の希望から絶望の深奥へ 独立五〇年史』の象徴的表現にもみられるように、視点は典型的なベシミズムである。

これら以外にも、次のようないくつかの著作が刊行されている。クーバー『一九四〇年以降のアフリカ 現在の過去』(二〇〇二年)は一九四〇年代以降のアフリカ現代史に関して学生向けに書かれた標準的教科書であり、著者フレデリック・クーバー (Frederick Cooper) はニューヨーク大学歴史学教授である。レーガム『独立後のアフリカ』(一九九九年)は学生や一般読者向けに書かれた入門書であり、著者コリン・レーガム (Colin Legum) は年鑑『アフリカ現代記録』(Africa Contemporary Record) 編集者として周知である。ファンデルフェーン『アフリカはど

うしたのか」(二〇〇四年)は学生と開発関係者向けに書かれた啓蒙書であり、著者ファンデルフェーン(Rod van der Veen)はオランダ政府外務省で働いた経験のある歴史家である。さらに多くの著書と論文(書評や記事を含む)が刊行されている。

本稿は、三冊の著書を含め、こうした著書と論文をアフリカ現代史研究として一括り(参考文献を参照されたい)にし、現代アフリカ政治経済に関する議論内容を検討し、主要なテーマと論点を表象的に剔出し整理することを目的とする。これはアフリカ現代史の書きかえに向けた基礎作業である。

1 アフリカ現代史の起点

——アフリカ独立か第二次世界大戦か

アフリカ現代史の起点(beginning)はいつか。多くの論者はアフリカ現代史の出発点をアフリカ独立に設定している。ニュージエント、アーノルド、メレデイス、レーガムの著書、そしてバーミンガムとマーティンの編著(Birmingham and Martin: 1998)、ビッセルとラドウの編著(Bissell and Radu: 1984)などの著作、そしてその他多くのアフリカ現代史に関する著書・論文は、アフリカ現代史

の起点をアフリカ独立にしている。

他方、若干の著書がアフリカ現代史の起点を第二次世界大戦にしている。たとえばクーパー『一九四〇年以降のアフリカ』は一九四〇年代からアフリカ現代史を書き始めている。その理由について、歴史の断絶という点では、第二次世界大戦のほうがアフリカ独立の形式的モメントよりも重要である、独立を分岐点とすることには意味がないからである、とエリス(S. Ellis)はクーパー著書に対する書評において、クーパーの視点を強調している(Ellis 2004: 158)。アンダーソン(D. M. Anderson)はクーパーの時期区分を支持し、次のように評言している。「アフリカの歴史家にとって、一九六〇年代中頃の、大陸のほとんどにおける植民地支配の終焉は、余りにも長い間、最も都合のいい分岐点であった。この不幸な分岐によって、歴史はたった二つの種類すなわち植民地前後と植民地に分けられた。この過ちの馬鹿らしさはクーパー『一九四〇年以降のアフリカ』においてみごとに暴露されてゐる」(Anderson 2004: 309-310)。

クーパー著書は「アフリカ史への新しいアプローチ」シリーズ第一巻として刊行されたので、アフリカ現代史は第二次世界大戦から開始されたという視点が「新しいアプローチ」として強調されたのである。しかし、これは「新しいアプローチ」ではない。約二〇年前、ケンブリッジ・

アフリカ史第八卷（一九八四年）は一九四〇年代（第二次世界大戦）を画期とし、他方、ユネスコ・アフリカ史第八卷（一九八五年）は一九三五年（エチオピア戦争）を画期としている。アフリカ（現代）史の時期区分は依然として重要な論点である。

2 アフリカ独立の意味

——民族運動が獲得したのか 計画的に付与されたのか

アフリカにおける植民地独立とは何だったのか。独立（independence）の含意をめぐってさまざまな議論が展開されてきた。議論の核心は、アフリカ人の民族主義運動が独立を獲得したのか、それとも植民地宗主国が計画的に独立を付与したのか、にある。脱植民地（decolonization）とは鋭い断絶を必ずしも意味しなかった、支配者と被支配者の関係の間には継続がある、とニュージエントは指摘している（Nugent 2004: 36-57）。民族主義闘争の高尚なドラマは、植民地から立ち去る植民地権力と新興独立国に出現するアフリカ人エリートの間の、示し合わせた約束を隠蔽するための煙幕にすぎなかった、と主張する論者もいる（Nugent 2004: 24）。新植民地主義理論では、独立はみせか

け（pretense）と分析され、ポスト・コロニアリズム理論によれば、独立は継続（continuity）と非継続（discontinuity）の混成（hybridization）過程とみなされた。

一九五〇年代末まで、イギリスの政治家も植民地の総督も、イギリス政府はさらに数年の間アフリカ植民地領域を支配し続けることを構想していた。一九五九年のある会議において、「彼らは独立のありそうな日付を考えていた。タンガニーカはたぶん最初であろう、しかし、それは一九七〇年までではなからう。ウガンダとケニアは一九七五年頃になるだろう」と議論されたと伝えられている（Meredith 2005a: 87）。これが事実だとすれば、現実には、アフリカ人の民族解放運動が独立の日程を大幅に前倒しさせたことになる。

「計画された脱植民地」に関する議論はフリント（Flint 1983）とピアス（Pearce 1984）によつて一九八〇年代初めに提起された。彼らによれば、イギリス政府が植民地改革の道に乗り出すことを決定し、それが脱植民地に結びついたのである。イギリスは飼いならした買弁階級を育成する誘惑を回避し、大衆的支持を示威する民族主義者に権力を引きわたす道を選択した、とニュージエントは説明している（Nugent 2004: 24）。脱植民地が計画されていたのか、それとも計画されていなかったのかについては、議論の余地がある。

いずれにせよ植民地に独立を付与することを決定した段階で、ヨーロッパの植民地権力は何を考えていたのか。彼らは植民地支配を独立によってアフリカ人が継承することに安心していたのか、それとも、彼らは植民地支配を終焉させることに不安を感じていたのか。ゲイリー (H. A. Gailey) は前者を願望的思考と解釈している (Gailey 2002: 9)。

もう一点は、独立 (independence) と脱植民地 (decolonization) の概念の相違の問題である (Gifford and Louis: 1988)。脱植民地の概念は次のように説明されている。「脱植民地とはあらゆる形態の植民地主義権力を暴露し解体する過程である。これは、植民地主義権力を維持した、そして政治的独立を達成したあとでも残している、植民地権力の制度的文化的諸勢力の隠された諸側面を解体することを含んでいる」(Ashcroft et al. 1998: 63)。スプリングホール (J. Springhall) によれば、脱植民地とは、海外の植民地領域に対する外的支配を実質的に終わらせるための現地の人びとと白人の主人による手段、新たな種類の関係の形成を、通常は意味している (Springhall 2001: 3)。植民地における民族主義運動が独立を獲得した政治過程を、独立を付与するに至った宗主国の政治過程を再検証すること、そして独立と脱植民地を再考することは重要である。アフリカ独立から五〇年の現在、独立とは何であったのか、再度、アフリカ側から検証することは価値あることである。

3 アフリカに接近する見方

——ペシミズムかオプティミズムか

アフリカをどのような観点で見えるのか。アフリカ現代史にアプローチする観点 (viewpoint) に関しては、ペシミズム対オプティミズムの絶えざる対立が継続している (Ellis 2002: 8)。メレディスが指摘したように、独立の幸福感が色あせたあと、アフリカに関する多くの著作はペシミズムの見方に席巻されてきた (Meredith 2005a: 13-14)。アフリカ問題をオプティミズムの姿勢で分析してきたデヴィッドソン (B. Davidson) までもが、一九九〇年代にはペシミズムに陥ってしまった、とニュージェントは述懐している (Nugent 2004: 8)。ムムダニ (M. Mamdani) が「この観点はアフロ・ペシミズムという名前の傾向に結晶化されている」と表現したことについて (Mamdani 1996: 285)、マリー (Murray 2000) が紹介している。

一九九〇年代中頃以降、新しいオプティミズムの観点すなわちアフリカ・ルネサンス (African Renaissance) 論が出現している。マンデラ (N. Mandela) は一九九四年のアフリカ統一機構 (OAU) 首脳会議において、「アフリカ・ルネサンスの誕生を阻止する障害は何もない、とわれわれ

は言わねばならない」と発言した。ムベキ (T. Mbeke) がマンデラのアフリカ・ルネサンスの呼びかけに呼応し、アフリカ・ルネサンスに関する自己のヴィジョンを明確にした (Mbeke 1998) ことは賞賛された (Meredith 2005a: 676-678)。ムベキは他の指導者とともに、アフリカ開発のための新パートナーシップ (NEPAD) を立ち上げ、アフリカ連合 (AU) の創設において主導性を発揮した。この二つのイニシアティブはアフリカ自身が主体性を奪還しつつあることを示感しており、二一世紀初めの段階におけるアフリカ・ルネサンス思想の具現化である。

現段階で、アフリカ・ルネサンスへの見通しが明確にあるわけではないけれども、将来的には、アフリカ・ルネサンスの可能性はある。アフリカ・ルネサンスが成功する可能性があるとすれば、その基本的要因 (必要条件) は、アフリカ経済が外部からの援助がなくても発展すること、とりわけ二つの経済大国すなわちナイジェリアと南アフリカが発展し協力することである、とアーノルドは分析している (Arnold 2005: 967)。ペシミズムの旗手バヤール (J.F. Bayart) はアフリカ・ルネサンスを土着主義 (nativism) と酷評しながらも、その将来についての唯一の確実性はアフリカが国際システムに参入することに関連していると指摘している (Bayart 2000: 367)。ニュージェントもアーノルドもアフリカ・ルネサンスの可能性への期待を否定して

いない。メレデイスはペシミズムである。

ファンデルフェーンはペシミズムだが、アフリカ・ルネサンスへの期待を結論として次のように表現している。「より重要なことは、多くのアフリカ人が、政治家を含めて、アフリカが直面する膨大な諸問題を解決しようとする姿勢を示し始めていることである。アフリカ・ルネサンスの可否を決定するもの、それは何よりも、その意志の強さにかかっている」 (Veen 2004: 370)。レーガムはオプティミズムへの傾向を示しているが、それはより広範なペシミズムへの有効な「解毒剤」である。オプティミズムを示す前進とペシミズムを示す後退の現象が同時に進行しているので、いずれかを過大 (過小) に評価してはならない。バランスのとれた分析が求められる。ペシミズムからオプティミズムへの観点の移行、とりわけアフリカ・ルネサンスの思想が出現しつつあることが重要なのである。

4 アフリカを分析する理論

—— 近代化論の枠組みから
適切な理論枠組みの構築へ

アフリカをどのように分析するのか。現代アフリカを分析する理論枠組み (theoretical framework) の状況は曖昧

である。アフリカ独立の一九六〇年代当時、鍵概念と主要理論は、ヨーロッパが伝統から近代へと発展した過程を近代化の歴史過程として典型化し、進んだヨーロッパのように遅れたアフリカも近代化過程を辿ることができるということを意味した、いわゆる近代化理論 (theory of modernization) であった (Ellis 2002: 4-5)。しかし近代化理論は必ずしも多くの論者によって受容されたわけではなかった。

たとえばクーパーは、近代化理論は彼らが直面していたパズルの解決にとって不適切であることに若干の論者が気づいていた、と指摘している (Cooper 2000: 328)。すなわちクーパーによれば、一九六〇年代から一九七〇年代にかけて、西側の理論はそれが現地に適用できるかどうかについて証明する必要性に直面していた、とチエゲ (M. Chege) が指摘していたというのである (Chege 1997: 136)。モデルとされたヨーロッパの近代化の歴史は近代化理論が説明したように均質・単一ではなかった。もちろんアフリカも均質・単一ではなかった。

一九七〇年代から一九八〇年代初めにかけて、近代化理論に代わって、従属理論 (theory of dependency) と低開発理論 (theory of underdevelopment) が出現したが (Nugent 2004: 5)、「これらはヨーロッパとラテンアメリカの関係についての議論では関心がもたれたものの、アフリカ問題に

関係する社会学者には、それほど大きな影響力を与えたわけではなかった。一九八〇年代中頃に出現した脱植民地理論 (theory of decolonization) の状況について、トウォドル (M. Twaddle) はアフリカにおける脱植民地の支配的パラダイムを四つのパラダイムに分類し、より弁証法的形態の追求をすべきであると結論づけた (Twaddle 1986)。

一九八〇年代中頃以降、ポスト・コロニアリズム理論 (theory of post-colonialism) が出現し、一九九〇年代中頃以降、一方では、アフリカ・ルネサンスの思考が誕生し、他方では、グローバリゼーション理論 (theory of globalization) が登場した。グローバリゼーション理論もアフリカ・ルネサンス論の思考も、アフリカ問題を理解するための有用な概念ではあるが、それらが理論であるかどうかについては問題である。確かに、近代化理論とグローバリゼーション理論には類似した側面があるので、グローバリゼーション理論は近代化理論の現代版である。「近代化理論と同様に、グローバリゼーション理論は単一の概念枠組みの形成に向けようとしている」とクーパーは主張している (Cooper 2001: 212)。

もう一つ忘れてならないのは、社会主義的發展の道、階級と国家、民族解放運動などの事項に関する分野で議論を展開してきた、マルクス主義理論 (theory of Marxism) の存在である。一九八〇年代中頃まで、たとえばトリウ

ルツィ (Trilzi 1981)・ロー (Law 1981)・ニール (Neale 1985)・イエヴシェヴィツキ (Jewsiewicki 1989) などはアフリカ史においてマルクス主義の議論を展開した。ニールは「マルクス主義はアフリカ史をめぐる西欧の思想を支配し続ける」と表現した (Neale 1986: 120)。イエヴシェヴィツキはアフリカニスト・マルクス主義の解体とマルクス主義の見解の豊穡さについて総括している。これらはマルクス主義のアフリカ歴史研究に関する重要な業績である (Jewsiewicki 1989)。

さらにもう一点、社会史研究の分野の出現を確認しなければならぬ。一九八〇年代から、アフリカ研究の新たな分野として社会史研究が開始された。この新しい傾向が出現したことによって、アフリカ史の焦点は国家制度の政治史から、社会とその内的変化の社会史に移行しつつあると指摘されている (Jewsiewicki 1993)。フィリ (K. M. Philin) は一九六〇年代から一九八〇年代までのアフリカ史研究の進展を一九八七年に整理し、アフリカ史研究を三つ——すなわち政治史、経済史そして社会史——に分類している。フィリは社会史への関心が一九八〇年代に登場したことを強調し、「アフリカにおける女性の歴史はほんの最近になって重要な注目を受け始めた」と言及した (Philin 1987: 43)。ヴァンシナ (J. Vansina) はアフリカ史のテーマの多様化はすでに一九七〇年代から始まっていたと分析

し、貧者、女性、農民、宗教そして健康などについての関心事項が「社会史」を構成しており、とりわけフェミニズムがもつとも明瞭な見本である」と指摘している (Vansina 1992: 86)。

バイールは外翻 (extraversion) と長期 (longue durée) の歴史の概念を提起し、外翻の長い軌跡によって歴史をみる方法論を堅持している (Bayart 2000)。バイールはアフリカと世界の長い関係が重要であると主張している。エリスは、「現在のアフリカとこれまで証明しうる過去のアフリカを区別する特徴を明確にするという意味で、アフリカはいかなる時代にあるのかについてオープンに議論することが必要である」と提言している (Ellis 2002: 26)。

いかなる分析枠組みをするのか、どのような理論アプローチを定立するのか、アフリカ現代史を書きかえる理論的枠組みを設定することは重要である。

5 民主主義の構築

——西欧型民主主義の模倣から アフリカ型民主主義の創造へ

アフリカは民主化 (democratization) に成功するのか。権威主義 (authoritarianism) に支配されてきたアフリカ

政治を民主主義 (democracy) に近づけることが民主化である。政治的危機の核心には、アフリカ人指導者が実効的な政府を樹立することに、そしてアフリカ型民主主義 (African-style democracy) を創造することに失敗してきたことがある。ビッグマンとエリートは人民の意思を通じて統治しなかった。アフリカにおける政治は新家産主義 (neo-patrimonialism) の恩顧 (パトロン・クライアント) 関係を通じて、あるいはレント・シーキングを通じて、個人的利益を追求するビッグマンの略奪政治 (predatory politics) によって妨害されてきた。

西側諸国と援助機関は政治的民主化と経済的自由化の命題を同時に遂行させなければならない一括の課題としてアフリカ諸国に命令した。民主化と自由化は、単純化すれば、先進ヨーロッパと後進アフリカの関係を固定化させたままでの、アフリカの西欧化である。しかし植民地主義が破綻したことは、植民地支配による西欧化が失敗したことを証明した。

必要なことは西欧化ではなく、逆にアフリカ化つまりアフリカは物事を自分で決めることである。アフリカ諸国に西欧型民主主義を導入するように圧力を加える西側の試みは成功しない。世界のどこにでも適用できる普遍的な民主主義の像を描き、それをアフリカに適用することは危険なことではない。アフリカが主体的に民主主義を導入するこ

とは必要であるけれども、民主主義はアフリカのやり方で採用されなければならない。重要なことは、民主主義の内容、実践と様式がアフリカの民主主義すなわちアフリカの社会、伝統、文化、政治経済に基づいたアフリカ型民主主義でなければならないということである。アフリカにおいて民主主義が意味をもつためには、アフリカの人びとが生活の改善のための政治過程に参加すること、権威主義と独裁の支配に終止符をうつこと、そしてアフリカの要因に基づいてアフリカ型民主主義を創造することである。

民主化との関連で、政党制度 (一党制と多党制) の問題は重要である。多党制すなわち民主主義ではない。多くのアフリカ諸国は独立後暫くの間、西欧型の政治制度を模倣したので、多党制 (multi-party system) を一旦は採用した。独立アフリカ諸国の民族的指導者はやがて権威主義の大統領になり、国民国家を建設し国民統合を促進するためという口実のもと一党制 (one-party system) を導入した。権威主義的支配者は独裁的支配を維持し野党の活動を抑圧するために一党制を利用した。一九六〇年代中頃には、一党制は支配的な政党制度になっていた。アフリカ社会主義を支持した若干の指導者は、一党制のもとでも選挙をし、一党制民主主義を建設できると議論した。一党制は一九八〇年代末まで堅固にみえた。

しかし一九八九年からの民主化の過程において、アフリ

カ諸国は多党制を再導入した。一九九一年五月に開催されたアフリカ政治学会研究大会において、ニオンゴ (P. A. Nyong'o) は「一党国家とその擁護者」について報告した (Nyong'o 1992: 1-8)。多党制が民主化に貢献しているかどうかは問題であり、多党制を導入した諸国は民主主義諸国であると考えられることは間違いないである。民主主義と政党制度の関係は再吟味されなければならない。

6 部族と民族

——他者批判の否定的部族論から 相互理解の積極的民族論へ

アフリカにおいて、部族と部族主義はどのように誕生したのか。部族と部族主義は植民地主義の産物である。民族 (ethnicity or nation)、部族 (tribe)、部族主義 (tribalism) に関する研究は比較的新しい研究分野になっている。ヴェイル (Vail 1989) 編『南部アフリカにおける部族主義の創造』は、一九世紀以前の歴史記録において部族はほとんど存在しなかったこと、部族主義はまったく存在しなかったこと、部族主義は創造 (creation) されたことを論証した (Etherington 1990: 153-155)。こうした研究によって「部族主義がまったくのところ植民地主義の発明 (invention)

であったこと」(Phiri 1987: 38) は明確である。

植民地時代、原住民統治機関 (native authority) 体制を確立する過程において、植民地行政官は原住民を統治する可能な単位を形成しようとした、それが部族である。タンガニカのある州知事が一九二六年に「各部族は明確な単位として考えられなければならない」と述べたことをメレディスは引用している (Meredith 2005a: 154)。植民地行政機関によって植民地統治の代理人 (agent) として任命された首長 (chief) が民族集団 (ethnic group) すなわち部族 (tribe) の象徴になったのである。植民地主義は植民地支配を正当化するために、部族間の敵対と嫌疑を悪化させ、対立と嫌疑は独立後も継続された (Arnold 2005: 71)。レインジャー (T. Ranger) は「部族を発明した (inventing)」(Ranger 1983) と表現し、ニュージェントは「部族を生産した (manufactured)」(Nugent 2004: 3) と表現した。

これまで部族と部族主義は否定的なものと考えられてきた。とりわけ国民国家建設の過程において、部族と部族主義の存在は国民形成の障害である、紛争の主たる要因の一つであるといわれてきた。「民族的」指導者は野党をしばしば「部族的」と攻撃したので、野党指導者は「民族的」指導者を「部族的」と非難した。彼らは部族という言葉を用いて他者批判の常套句として使用したのである。

しかしながら最近では、部族を肯定的に考えようとする

新たな思考の傾向がでている。ニュージエントは、「二〇世紀末までに、国民のアイデンティティは民族のアイデンティティを抑圧することによって形成できないこと、そして、民族には積極的側面があることを喜んで承認する動きがある」「伝統的指導者は社会的緊張を緩和することにおいて重要な役割を果たしてきた」と指摘している (Nugent 2004: 484, 487)。これは積極民族理論 (theory of positive ethnicity) 、すなわち対立を緩和し紛争を解決し国民 (nation) を形成するためには民族 (ethnicity) の積極的側面を活用することが重要である、という考え方を招来している。

独立以降、伝統的制度はかなり自己改革し、首長は威信を保持し、伝統と首長は重要であるとの認識が出現している。ニュージエントによれば、唯一の例外はタンザニアであり、ニエレレ政権は伝統的制度を完全に廃絶した、と紹介している (Nugent 2004: 136)。ニュージエントの議論が正しいかどうかも含めて、今日の民主化の過程において、伝統制度と首長勢力の役割について再検討することは必要である。

民族集団間の平等を促進するための一つの実験はエチオピアにおける連邦制度にみられる。地域を付与された各民族体 (nationality) あるいは各民族 (ethnicity) は分離の権利を含めて、無条件の自決権を与えられている (Nugent

2004: 487)。民族連邦制度すなわちエチオピアにおける民族集団の連邦制度の実験について関心が寄せられている (Turton 2006)。

7 国境線神聖論の崩壊

——現状維持の固執から

国境線変更のルール作りへ

アフリカにおける国境線は神聖不可侵か。国境線についてのルールが変更されつつある。一九八〇年代まで、植民地の遺産として継承された国境線 (boundary) は、現状維持 (uti possidetis) の原則が適用され、神聖であると考えられてきた。国境線を変更しないというルールは一九六四年のアフリカ統一機構 (OAU) 首脳会議で決定された。首脳会議は国境紛争に関する決議を採択し、継承された国境線を受け入れるように加盟国に要請した。国境線は変更しないことになったので、政府の実効的支配の如何に関係なく、アフリカのすべての存在は領域的存在として国際社会から承認された。かくして法律国家 (juridical state) の議論が登場した。一九九一年、アフリカ独立三〇周年を記念した論考において、リマー (D. Rimmer) はアフリカの国境線の永続性 (durability) を強調した (Rimmer 1991b: 93)。

エリトリアがエチオピアから一九九三年に分離独立した際、多くの論者はエリトリアのエチオピアからの分離独立は例外的事例であると分析したが、これをOAU原則からの逸脱であると分析した論者もいた (Nugent 2004: 440)。

スーダンの南北内戦を終結させるために二〇〇五年一月に締結された包括和平協定は、スーダン南部の人びとの自決権を承認し、南部の人びとは協定の六年後に実施される国民投票によって独立の権利をもつことを承認した。国際社会がこの協定を承認したことは、植民地に由来する国境線はもはや神聖ではないこと、つまりアフリカでも国境線は変更可能であることを意味した。境界紛争の根源は植民地列強が決定した人工的で不自然な境界線に遡る。国境線をめぐる紛争は数多くある。ラレモン (R. R. Laremont) は「アフリカ諸国の国境線がわれわれの目の前で引き直されていることは明らかである」 (Laremont 2005: 28) と二〇〇五年に指摘した。国境線が変更可能な時代における国境線画定の新しいルールを策定する必要がある。

ソマリランドの事例を忘れてはならない。かつてのイギリス領ソマリランド、現在のソマリアの北部、ソマリランドは一九九一年に独立を宣言したが、国際社会から承認されていない。エリトリアの独立が承認されたのに、ソマリランドの独立が承認されていないことは理解できない。実際、ソマリランドは民主的国家として機能しているのである。

8 アフリカ資本主義

——ケニア論争の教訓と 資本主義論争の貧困

アフリカ資本主義 (African capitalism) の性格はどのようなものか。ケニアにおける資本主義の性格をめぐる議論は「ケニア論争」と呼ばれた。低開発理論や従属理論の支持者は、ケニアは外国資本に支配されている、ケニアは新植民地主義的な従属の典型事例である、と分析した。リーズ (C. Leys) は、ケニア・ブルジョアジーは進歩的役割を担った民族ブルジョアジー (national bourgeoisie) であったが、現地ブルジョアジー (indigenous bourgeoisie) は持続的な資本主義発展を産みだす歴史的使命の遂行に失敗した、と議論した (Leys 1975)。議論の適否は別にして、ケニア論争はアフリカ資本主義論争としては有意義であった。残念ながら、その後、アフリカ資本主義そのものをめぐる論争は低調である。冷戦が終わり、グローバリゼーションが進行する現在、再度、アフリカ資本主義の性格と様式に関する議論をすることは必要である。

9 アフリカ社会主義

——社会主義の精神と資本主義の資金

アフリカに社会主義は存在したのか。アフリカ現代史をめぐる論争の最大のテーマの一つはアフリカ社会主義論争である。アフリカ社会主義について、ニュージエントは「アフリカ社会主義は首尾一貫性がなく、さまざまに解釈された、曖昧でロマンティックなボブりにすぎなかった」と描写した (Nugent 2004: 146)。「社会主義は精神の持ち方 (attitude of mind) である」とニエレレがいみじくも述べたように、アフリカ社会主義は概念そのものが漠然としていた。タンザニア政府の政治家と役人は社会主義の精神について説教しながら、実際には、資本主義に基づいて現実の政策を遂行した。端的にいえば、資本主義の資金で社会主義を建設しようとしたのである (Arnold 2005: 157)。

社会主義は、社会科学の学術用語でいう、資本主義に對抗する概念ではなかった。アフリカ社会主義は社会主義精神の持ち方と資本主義の資金からなる混成概念である。ニュージエントはアフリカ社会主義の成立要件 (基準) として、自助、国家、社会的平等、大衆の参加を列挙した (Nugent 2004: 139-140) が、この基準によれば、アフリカ

に社会主義国は存在しなかった。なぜなら、自助はなく、開発もなく、参加もなかったからである。

さてアフリカ社会主義に関しては、「アフリカ社会主義」 (African socialism) と「科学的社会主義」 (scientific socialism) という二つの表現が使用されたが、この二つの相違を理解することは困難であり、また無意味である。ガーナのンクルマ (K. Nkrumah) は「アフリカ社会主義」を非難し、「科学的社会主義」が「正しい道」であると「決定」した。コンゴのングアビ (M. Nguabi) はアフリカ社会主義とは距離をおき、社会主義は一つ、マルクスとエンゲルスが形成した科学的社会主義だけであると、「宣言」した。ベナンのケレク (M. Kérékou) はマルクス・レーニン主義を政権の公式イデオロギーとして「規定」した。一般的にいえば、「アフリカ社会主義」は社会主義としての概念が曖昧であり、「科学的社会主義」は社会主義と関係がほとんどなかった、と考えられる。

大統領が社会主義を宣言すれば、その国はアフリカ社会主義国あるいは科学的社会主義国になった。しかしガーナ、コンゴ、ベナンなどは一度も社会主義国になったことがなかったのである。アフリカ社会主義と科学的社会主義についての分析者の説明は大雑把で混乱していた。オッタウェイ (Ottaway and Ottaway 1981) はアフリカ共産主義 (Afro-communism) を議論し、ソール (Saul 1985) はアフリカ

リカ・マルクス主義 (Afro-Marxism) に言及し、ケラーとロスチャイルドの著書 (Keller and Rothchild 1987) はアフリカ・マルクス主義政権について解説し、ヒューズ (Hughes 1992) はマルクス主義のアフリカからの撤退について議論した。こうした議論に共通する特徴は、社会主義の概念を社会科学の学術用語として厳密に適用していないことである。アフリカ社会主義における「社会主義」の用語はたんなる修辭 (レトリック) にすぎなかった。

10 ウジャマー社会主義の実験

——「新鮮な空気」か「不快な悪臭」か

ウジャマー社会主義とは何だったのか。アフリカ社会主義のテーマとして注目されたのはニエレレの社会主義思想、そしてタンザニアにおけるウジャマー社会主義の実験であった。タンザニアの支配政党、タンガニーカ・アフリカ民族同盟 (TANU) は、ニエレレが提起した社会主義の精神と原則を規定するアルーシャ宣言を一九六七年に支持し、タンザニアは社会主義国になった。ニエレレはウジャマー村づくり計画が自発的に遂行されることを強調した。ニエレレ政権はウジャマー運動を奨励したが、進捗は遅かった。そこでニエレレは人びとを誘導し、最終的には

強制力を行使して人びとを動員したので、計画の実践は破綻した。共同耕作の思考も社会主義の戦略もなかった。タンザニアでは、ニエレレが開始した方針に誰も文句をいう者はいなかった、とメレデイスは述懐している (Meredith 2005a: 256-257)。アーノルドの指摘によれば、ニエレレは社会主義が実際に達成したことに關して議論したことはなかった、最終的に失敗したけれども、ニエレレの社会主義の信念は大陸の「新鮮な空気」であった、といわれた (Arnold 2005: 279)。

実際はどうだったのか。タンザニア政府は社会主義政策を導入しなかった。ウジャマー村づくり政策は社会主義的生産様式を導入しないで、単に新しい村を作る計画にすぎなかった。そのウジャマー政策も実際のところ完全に失敗し、多大の経済的人的損害を残した。タンザニア政府は社会主義政策について総括をせず、ニエレレは社会主義の終わりについて言及しなかった。「アルーシャ宣言が開発の青写真として公式に放棄されたのは、社会主義の実験が始まって二三年後のことであった」とメレデイスは記述している (Meredith 2005a: 373)。今日でもニエレレとその社会主義を賞賛する人びとはいる。しかし、ウジャマー政策の被害を受けた多くの人びとにとって、ウジャマーの風は「新鮮な空気」ではなく、「不快な悪臭」にすぎなかった。

11 新植民地主義

――従属状態は今も昔も継続する

アフリカにおいて、植民地主義は廃絶されたのか。

一九六〇年代にアフリカ諸国は独立したけれども、経済的束縛は継続されているので、独立アフリカ諸国は旧植民地列強や先進国に従属している、という議論が新植民地主義理論 (theory of neo-colonialism) である。現在、先進国主導の国際システムはグローバリゼーション時代の新植民地主義であり、新植民地主義はアフリカにおける援助供与国の原則になっている。他の手段、主として経済的関係を通して、西側先進国のアフリカ支配は継続している。

一九八〇年代末、新植民地主義的状况は強化された。というのは、国際通貨基金 (IMF) と世界銀行 (WB) そして主要援助供与諸国がアフリカにおける経済的統制を強化したからである。

新植民地主義という批判は旧イギリス領植民地よりも旧フランス領植民地に妥当していると、ニュージエントは言及している (Nugent 2004: 49)。しかしバヤールに言わせれば、アフリカに対して本当の大陸政策をもとうとしている唯一のヨーロッパ国家こそフランスである (Bayart

2000: 230)。新植民地主義においてイギリスとフランスのどちらが強固であるのか、などと議論しても生産的ではない。新植民地主義の政治的経済的システムそのものを分析することが重要である。アジアイ (J. F. Ade Ajayi) は「新植民地主義とは、政治的独立がアフリカ人民の国際社会とりわけ旧宗主国列強への従属を増加させたこと、そしてアフリカの人民が自分自身の事柄を自己管理できていないことを、含意している」と指摘している (Ajayi 1997: 42)。

次の定義は有効である。「新植民地主義という用語は、元植民地に対するいずれかのそしてすべての形態の支配に関して広範に使用されている。広義の意味において、この用語は、いわゆる第三世界がグローバリゼーションの圧力の下で、独立した経済的政治的アイデンティティを発展させることができないことを意味している」 (Ashcroft et al. 1998: 163)。新植民地主義の「見えざる手」に関するロザームンド (D. Rothermund) の結論は次の通りである。「この見えざる手は外側からのみ異種の経済に触れることができる。ほとんどのポスト・コロンIAL経済は異種のままであり、多様性を欠如している。このように影響を受けた人びとにとって、世界市場の「見えざる手」 (invisible hand) は新植民地主義の「隠された手」 (hidden hand) のようである」 (Rothermund 2006: 273)。

12 援助は先進国の免罪符

——援助継続から援助脱出へ

先進国はなぜアフリカを援助するのか。これまで膨大な量の援助が投入されたにもかかわらず、援助が失敗したことは明白である。アフリカは援助依存から脱出しなければならぬ、とアーノルドは主張している (Arnold 2005: 92)。援助は経済開発を支援せず、むしろ腐敗を助長し依存を深化させ、構造調整計画 (SAP) は顕著な経済成長をもたらさなかった。SAP が急速な開発をもたらさなかったとすれば、その社会的結果はどうなるのが問題である。SAP のもとで、アフリカ諸国は援助供与国に依存するようになった。SAP はアフリカの開発潜在力を引き出すことに失敗した (Nugent 2004: 334-336)。三〇〇億ドルの西側の援助がアフリカに投下されたが、確認できるような効果はなかった、とメレデイスは指摘している (Meredith 2005a: 683)。ファンデルフェーンは「より一般的には、彼ら (国際通貨基金と世界銀行) は彼らの経済戦略が経済進歩の達成目標に到達することに失敗したことを認めた」と記述している (Veen 2004: 303)。援助が失敗したことに関する一般的見解は正しい。

現在の国際政治経済システムにおいて、先進国が政府開発援助 (ODA) システムを継続するのは、彼らの国益である経済的既得権益すなわち補助金と関税障壁を維持するためである。メレデイスは次のように説明している。先進国はアフリカの生産者の努力を無力化するために補助金と関税障壁の体制を操作している。農業補助金の総額は一日一〇億ドル、一年三七〇億ドルであり、これはアフリカ全体の国内総生産 (GDP) 総額を超えている。アフリカ諸国の生産物は先進世界が課している関税障壁に直面しており、先進国はアフリカの製品を先進国市場から実質的に締め出している (Meredith 2005a: 684)。これは援助が先進国の経済特権を守るための免罪符になっていることを意味している。

援助から脱出できるかどうかが問題であり、当事者によつて、その回答は違っている。先進国は援助から脱出できない、なぜなら、援助は先進国有利の不公平な国際経済システムを維持するための方策であり、補助金と関税は先進国の農家が生活を維持するために必要だからである。アフリカ諸国の支配エリートは援助から脱出できない、なぜなら、援助は彼らが権力を維持するための財源になっているからである。アフリカの大多数の人びとは援助から脱出できる、なぜなら、彼らは援助なしでも日常生活はできるからである。

援助との関連において、非政府組織（NGO）の援助をどのように評価するかは難しい問題である。国際的NGOの援助に対しては、これに憤慨する国もあれば、歓迎する国もある。援助という点では同じであるが、ODAとNGOの評価については区別して考えなければならない。確かに、NGOの援助が人びとの生活改善のために貢献している事例はあるけれども、他方、否定的に機能している事例もある。われわれは「一般的に、NGOはポスト・コロニアル国家の弱化に貢献してきた」（Nugent 2004: 357）というニュージェントの論点に留意しなければならない。

アフリカ独立五〇年を迎えて、アフリカ現代史を再考する動きが世界でも日本でも進行している。本稿で取り上げた論点の一部にすぎない。議論し直すべきテーマと論点、検証すべき事件と出来事は多岐にわたる。本格的な議論と分析が展開されることを期待したい。

●付記

本稿は日本アフリカ学会シンポジウム「アフリカ独立五〇年を考える」（二〇〇八年五月二四日）における報告（Masahisa Kawabata, *Rewriting a Contemporary History of Africa*, May 2008, Research Institute for Social Sciences, Ryukoku University）の一部を改稿したものである。なおシンポジウムの概要については拙稿「シンポジウム『アフリカ独立五〇年を

考える』（『アフリカ研究』七三号、二〇〇八年二月、五七一―六〇頁）を参照されたい。

●参考文献

- Ajayi, J. F. Ade (1997) "Decolonisation and the Birth of Neocolonialism," S. McGrath et al. eds. *Rethinking African History*, Edinburgh: University of Edinburgh, pp. 37-44.
- Anderson, David M. (2004) Book Review [F. Cooper, *Africa since 1940*], *African Affairs*, 103 (411): 309-311.
- Arnold, Guy (2005) *Africa: A Modern History*, London: Atlantic Books.
- Ascroft, Bill, Gareth Griffiths and Helen Tiffin, eds. (1998) *Post-Colonial Studies: The Key Concepts*, London: Routledge.
- Bayart, Jean-François (2000) "Africa in the World: A History of Extraversion," *African Affairs*, 99 (395): 217-267.
- Birmingham, David and Phyllis M. Martin, eds. (1998) *History of Central Africa: The Contemporary Years since 1960*, New York: Longman.
- Bissell, Richard E. and Michael S. Radu, eds. (1984) *Africa in the Post-Decolonization Era*, London: Transaction Books.
- Carter, Gwendoreen M. and Patrick O'Meara, eds. (1985) *African Independence: The First Twenty-Five Years*, Bloomington: Indiana University Press.
- Chege, Michael (1997) "The Social Science Area Studies Controversy from Continental African Standpoint," *Africa Today*, 44: 133-142.

- Chikeka, Charles O. (1998) *Decolonization Process in Africa during the Post-War Era, 1960-1990*. Lewiston: The Edwin Mellen Press.
- Collins, Robert O. et al. eds. (1997) *Problems in the History of Modern Africa*. Princeton: Markus Wiener Publishers.
- Cooper, Frederick (1999) "Africa's Pasts and Africa's Historians," *African Sociological Review*, 3(2): 1-29.
- Cooper, Frederick (2000) "Africa's Pasts and Africa's Historians," *Canadian Journal of African Studies*, 34(2): 298-336.
- Cooper, Frederick (2001) "What is the Concept of Globalization Good for? An African Historian's Perspective," *African Affairs*, 100(399): 189-213.
- Cooper, Frederick(2002) *Africa since 1940: The Past of the Present*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Crowder, Michael ed. (1984) *The Cambridge History of Africa, Vol. 8, From c.1940 to c.1975*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Davidson, Basil (1992) *The Black Man's Burden: Africa and the Curse of the Nation-State*. London: James Currey.
- Ellis, Stephen (2002) "Writing Histories of Contemporary Africa," *Journal of African History*, 43(1): 1-26.
- Ellis, Stephen (2004) Book Review [F. Cooper, *Africa since 1940*], *Journal of African History*, 45(1): 158-159.
- Ellis, Stephen (2005) Book Review [P. Nugent, *Africa since Independence, Africa Research and Documentation*, (37): 47-49.
- Ellis, Stephen (2007) Book Review [G. Arnold, *Africa: A Modern History*], *Journal of African History*, 48(2): 317-318.
- Etherington, Norman (1990) Book Review [L. Vail, *The Creation of Tribalism in Southern Africa*], *Journal of African History*, 31(1): 153-155.
- Falola, Toyin. ed. (2003) *Africa, Volume V, Contemporary Africa*. Durham: Carolina Academic Press.
- Flint, John (1983) "Planned Decolonization and its Failure in British Africa," *African Affairs*, 82(328): 389-411.
- Gailey, Harry A. (2002) *History of Africa, Vol.IV, Contemporary Developments*. Malabar: Krieger Publishing Company.
- Gifford, Prosser and W. Roger Louis, eds. (1988) *Decolonization and African Independence: The Transfer of Power, 1960-1980*. London: Yale University Press.
- Guest, Robert (2004) *The Shackled Continent: Africa's Past, Present and Future*. London: Pan Books.
- Hughes, Arnold. ed. (1992) *Marrism's Retreat from Africa*. London: Frank Cass.
- Jewsiewicki, Bogumil (1989) "African Historical Studies: Academic Knowledge as 'Usable Past' and Radical Scholarship," *African Studies Review*, 32(3): 1-76.
- Jewsiewicki, Bogumil (1993) "African Studies in the 1980s: Epistemology and New Approaches," T. Falola, ed. *African Historiography: Essays in Honour of Jacob Ade Ajayi*. London: Longman. pp.218-227.
- Jewsiewicki, Bogumil and David Newbury, eds. (1986) *African*

- Historiographies: What History for Which Africa?*. London: Sage Publications.
- Keller, Edmond J. and Donald Rothchild, eds. (1987) *Afro-Marxist Regimes: Ideology and Public Policy*. London: Lynne Rienner Publishers.
- Larémont, Ricaro René, ed. (2005) *Borders, Nationalism, and the African States*. London: Lynne Rienner Publishers.
- Law, Robin (1981) "How not to be a Marxist Historian: The Althusserian Threat to African History." Raphael Samuel, ed. *People's History and Socialist Theory*. London: Routledge and Kegan Paul, pp.313-319.
- Legum, Colin (1999) *Africa since Independence*. Bloomington: Indiana University Press.
- Leys, Colin (1975) *Underdevelopment in Kenya: The Political Economy of Neo-colonialism 1964-1971*. London: Heinemann.
- Mamdani, Mahmood (1996) *Citizen and Subject: Contemporary Africa and the Legacy of Late Colonialism*. Princeton: Princeton University Press.
- Mazrui, Ali A., ed. (1993) *General History of Africa*, 8, *Africa since 1935*. London: Heinemann.
- Mbeki, T. (1998) *Africa: The Time has Come*. Cape Town: Tafelberg.
- Meredith, Martin (2005a) *The State of Africa: A History of Fifty Years of Independence*. Johannesburg: Jonathan Ball Publishers.
- Meredith, Martin (2005b) *The Fate of Africa: From the Hopes of Freedom to the Heart of Despair: A History of Fifty Years of Independence*. New York: Public Affairs.
- Murray, Martin (2000) "Configuring Trajectory of African Political History." *Canadian Journal of African Studies*, 34(2): 376-386.
- Nabudere, Dani W., ed. (2000) *Globalisation and the Post-Colonial African State*. Harare: AAPS Books.
- Neale, Caroline (1985) *Writing "Independent" History: African Historiography, 1960-1980*. London: Greenwood Press.
- Neale, Caroline (1986) "The Idea of Progress in the Revision of African History, 1960-1970." Bogumil Jewsewicz and David Newbury, eds. *African Historiographies: What History for Which Africa?*. London: Sage Publications, pp.112-122.
- Nugent, Paul (2004) *Africa since Independence: A Comparative History*. New York: Palgrave Macmillan.
- Nyong'o, P. Anyang', ed. (1992) *50 Years of Independence: The Lost Decade?*. Nairobi: Academic Science.
- Ottaway, David and Marina Ottaway (1981) *Afrocommunism*. New York: Africana Publishing Company.
- Pearce, Robert (1984) "The Colonial Office and Planned Decolonization in Africa." *African Affairs*, 83(330): 77-93.
- Phillips, John Edward, ed. (2005) *Writing African History*. New York: University of Rochester Press.
- Phiri, Kings M. (1987) "African History: An Assessment and an Agenda for Future Research." *African Studies Review*,

30(2): 35-47.

Ranger, Terence (1983) "The Invention of Tradition in Colonial Africa." Eric Hobsbawm and T. Ranger, eds. *The Invention of Tradition*. Cambridge: Cambridge University Press, pp.211 - 262.

Rimmer, Douglas, ed. (1991 a) *Africa 30 Years on*. London: Royal African Society.

Rimmer, Douglas (1991 b) "Thirty Years of Independent Africa." *Africa Insight*, 21 (2): 90-96.

Rothermund, Dietmar (2006) *The Routledge Companion to Decolonization*. London: Routledge.

Saul, John S. (1985) "Ideology in Africa: Decomposition and Reconstruction," Gwendolen M. Carter and Patrick O'Meara, eds. *African Independence: The First Twenty-Five Years*. Bloomington: Indiana University Press, pp.301 -329.

Springhall, John (2001) *Decolonization since 1945: The Collapse of European Overseas Empires*. New York: Palgrave.

Trilzi, Alessandro (1981) "Decolonising African History," Raphael Samuel, ed. *People's History and Socialist Theory*. London: Routledge and Kegan Paul, pp.286- 297.

Turton, David, ed. (2006) *Ethnic Federalism: The Ethiopian Experience in Comparative Perspective*. Oxford: James Currey.

Twaddle, Michael (1986) "Decolonization in Africa: A New British Historiographical Debate?," Bogumi Jewsiewicki and David Newbury, eds. *African Historiographies: What History*

for Which Africa? London: Sage Publications, pp.123-138.

Vail, Leroy, ed. (1989) *The Creation of Tribalism in Southern Africa*. London: James Currey.

Vansina, J. (1992) "Some Perceptions on the Writing of African History: 1948-1992." *Itinerario*, 16(1): 77-91.

Vaughan, Megan (1994) "Colonial Discourse Theory and African History, or has Postmodernism passed us by?," *Social Dynamics*, 20(2): 1 -23.

Yeen, Roel van der (2004) *What went Wrong with Africa*. Amsterdam: KIT Publishers.

(かわはた・まゆひろ／龍谷大学法学部)